

# 歴史学研究

## 歴史学研究会 編集

2020. 9

創刊1000号記念

### 特集 進むデジタル化と問われる歴史学

- 特集によせて ..... 歴史学研究会編集委員会 (1)  
デジタル化される日本史史料の現状 ..... 山田太造 (2)  
中国語圏の電子図書館・データベースと中国近現代史研究  
——アウトリーチ活動を中心にして—— ..... 大澤 肇 (11)  
ECCOから見えるデジタル史料の宇宙 ..... 近藤和彦 (24)  
アンデス植民地史への人文情報学的アプローチ—先住民の総集住化の事例—  
..... 斎藤 晃・近藤康久・溝田のぞみ・小山朋子 (32)  
出版界デジタルシフトの憂いと希望 ..... 橋元博樹 (39)  
——学術出版はデジタル時代をどう生きるか—  
Twitterを通じた歴史研究の成果発信 ..... 丸島和洋 (46)  
——NHK大河ドラマ「真田丸」時代考証の事例から—  
「電腦中国学」の20年 ..... 佐藤信弥 (51)  
Twitterを通じた歴史学の研究成果の発信とコミュニケーション  
..... 永本哲也 (56)  
歴史家ワークショップ—デジタル化時代における草の根的国際化—  
..... 市川佳世子・中辻柚珠・山本浩司 (62)

## 歴史家ワークショップ —デジタル化時代における草の根的国際化—

市川佳世子・中辻柚珠・山本浩司

### はじめに

- I 歴史学の問われる国際化
- II スキルの向上と若手育成
- III 社会発信を考える

結びにかえて

### はじめに

歴史研究者の国際的な発信力を強化するためには何が必要か。この問いに向き合い、知識と経験を共有するために歴史家ワークショップの活動は生まれた。国際学会への参加や発表、国際誌への投稿の促進など、取り組んできた内容はデジタル化を意識してきたというよりはむしろ、伝統的な学術活動へのサポートである。しかし、その活動を理想的な形で行うために、ITリテラシーのある大学院生や若手研究者のアイディアを取り入れて、積極的にデジタルツールを活用してきた。それが国内外の研究者の気軽なやりとりを可能にし、所属や分野を超えたピアサポートを促進し、新たな企画が生まれてくる土壤を育んできたのである。このようなコミュニケーションのあり方こそが国際発信の基盤ともなり、日本の歴史学界をよりオープンな議論の場へと変えていくのではないだろうか。本論考も、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の流行拡大に伴い外出自粛の要請が行われた2020年3月から5月の間に、Slackで進捗を報告し合い、双方向通信アプリのZoom等を活用してオンライン・ミーティングを行なながら、Google Docsを用いて札幌、東京、京都、広島、スイス、アイルランド、レバノンなど国内外に散らばる複数の運営委員のコメントを取り入れながら共著が進められた。まさに本特集のテーマ「デジタル化時代」の産物である。本稿では、こうしてデジタル化の恩恵を受けた言わば草の根運動的な国

際化の活動を、総論的・客観的な視点と具体的・個別的・主観的な視点の両方から紹介する。

歴史家ワークショップは2016年5月に活動を開始した。当初は東京大学経済学部の付属研究所である日本経済国際共同研究センターの研究会として、英語によるセミナーを定期開催していたポリティカル・エコノミー研究会の活動の番外編として始まった。それが翌年までに独立した運営メンバーと内容をもつ活動へと発展したものである<sup>1)</sup>。2018年春から一般財団法人中辻創知社の会議開催費助成を三度取得し、2018年10月には東京俱楽部の文化活動助成金を得た。2019年度後半から「経済史、経営史、および歴史研究国際化のための基盤形成プロジェクト」として2年半の大型予算を東京大学本部から獲得して2名の特任研究員を迎え、さらに活動を拡充してきた。その過程で生まれた活動領域が「国際発信力強化」、「スキルの向上と共有」、「成果の社会発信」の三つである。

本特集の主題である「デジタル化」は、歴史家ワークショップを含むさまざまな学術活動において無視できない技術的・社会的条件といえる。一方で、本稿に与えられた「国際発信」および「国際化」という個別テーマは、この団体の活動の主軸であるが、多面的で難しい課題である。デジタル化時代においても、その難しさは変わらないところが多い。日本で生み出された優れた研究成果を世界に向けて発信する方向性自体には異論は少ないだろう。しかし、多くの研究者がこれまで留保や不安を隠してこなかつたことも確かだ。デジタル化時代における歴史学の国際化を語るためにには、まず国際化に対する正当な留保や漠然とした不安を言語化し整理する必要があるだろう。本稿では、第I章でその作業を行った上で、歴史家ワークショップのこれまでの活動と、

今後果たしうる役割について考えたい。第Ⅱ章では、歴史家ワークショップの主軸となる国際発信力強化や若手研究者育成の取り組みについて、第Ⅲ章では社会発信の取り組みを紹介する。専門分野の垣根を超えて交流し、スキルを磨き合うことは、言語や文化の壁を超えて行う国際的学術交流や、大学の枠組みを超えて行う社会発信のための基礎となり得る。スキル共有と社会発信の取り組みが、実は国際発信力強化とも密接な関係にあることが、以下で示されるだろう。

なお、本稿の執筆には、准教授の山本浩司、博士研究員の市川佳世子、博士課程の中辻柚珠という、異なる立場から活動に関わってきた3名が取り組んだ。山本が「はじめに」と第Ⅰ章を、市川が第Ⅱ章と「結びにかえて」を、中辻が第Ⅲ章の執筆を担当した。その立場の違いを解消することなく共著の形を取ることで、組織内部における視点と経験の多様性や緊張関係にも光をあてることにする。つまり、本稿は、発足4年を経た学術プロジェクトの「中間報告」として読むこともできるが、特に大学院生の中辻が自身の体験を語る第Ⅲ章は、形式的な報告書には掲載されないような、試行錯誤（と経験不足によるしわ寄せ）についての証言、もしくはある種の「エゴ・ドキュメント」として読むこともできるだろう<sup>2)</sup>。こうして複数の視点から記録することは、草の根的な学術活動の豊かさと難しさを明示する機会ともなる。それは、歴史家ワークショップという組織のあり方——批判と反省にひらかれた試行錯誤の連続を目指す組織のあり方——を伝える試みでもある。

## I 歴史学の問われる国際化

歴史学研究の「国際化」を語る上でもっとも重要な論点として、国際化を英語化だとみなしてよいのか、という問題がある。最有力の「国際言語」となった英語を母語とする者が不當に競争優位を得てしまうという公平性の問題は決して無視できない。また、成果発信を含む学問的営みを单一言語化することは、日本語を含む諸言語で蓄積されてきた知的伝統の軽視を引き起こし、知的生態系の多様性が損なわれるおそれもある。歴史研究者たちは、権力や

従属関係が物理的強制力を伴わずともさまざまな形で発露することに常に敏感であり続けてきた。こうした歴史学に携わるわれわれが、グローバル化の加速を前に、その学問的方法論はもちろん、使用言語についても単一化の弊害を敏感に察知しているのは、健全な学問的態度である。歴史家ワークショップでもその弊害を自覚し、フランス語やドイツ語など諸外国語の使用を意識したイベントを行い、日本語を使用して日本史についての国際ワークショップを開催するなど、より多元的な国際化を目指していることを強調しておきたい。英語による成果発表は、あくまでも国際化における有力な手段でしかないのである。手段が目的化し、学問の多様性を蝕むという、不幸な意図せざる帰結を引き起こしてはならない<sup>3)</sup>。

歴史学の国際化を語る際に聞こえてくる第二の留保は、外国語で発信することで日本語での知的活動がおろそかになるのではないか、というものだ。このように二者択一を前提することは果たして妥当だろうか。学務やその他の仕事に追われることで研究と執筆に費やせる時間が大幅に減っていることを不可避的現実と捉えるならば、こうした二者択一の発想が現実味を帯びてくるだろう。しかし、国境を超えて多くの研究者と交流しながら知識の前進に貢献しようとすることは、母国語での研究・教育活動と同じく、本質的に知的興奮と喜びに満ちた営みである（そうであるように支援するのが歴史家ワークショップの根底にある考え方である）。より現実的な立場をとるならば、学術界における国際協力の重要性が増している状況下で、大多数の研究者が日本語での発信のみにフォーカスし続けた場合、さらなる予算と人員削減のための口実とされてしまう危険性も考慮すべきだろう<sup>4)</sup>。日本語での発信や知的伝統を守ると同時に、研究時間の確保と拡充を模索し、国内外での学術活動を両立していくにはどのような環境が整えばよいのか。この課題には個人レベルだけではなく、より組織的なレベルでも取り組むべきだろう。

こう提案する場合、ただちに第三の留保が浮かぶ。それは、国際化がはるかに進んでいるSTEM（科学・技術・工学・数学）分野と同列に語るべきでは

ないという点である。科学や社会科学は数式を多用しているので英語での執筆が比較的容易で、歴史学を含めた人文系学問の方が外国語による執筆が難しいと言えるかどうかについては、専門家に判断を譲る。しかし、1995年の科学技術基本法に結実することになる日本の戦後大学政策は、特に国立大学において理系諸分野に重点的に財政支援を行なってきた事実を、歴史研究者であれば忘ることはできないだろう<sup>5)</sup>。「理系は自助努力で国際化した。人文系諸分野も自力で国際化を」という主張は、日本における学術国際化についての経路依存性を無視した暴論である。理系諸分野と同じペースで、もしくは同じ類いの国際化をすることは、歴史学に従事する我々が望む方向ではないだろう。

歴史家ワークショップは、以上のような問題意識のもとに発足し、既存の学会、研究会、大学研究室、科研費プロジェクト等を補完する活動を行なってきた。その際の重要な参考点として、西洋中世学会若手セミナーの取り組みや、ロンドン大学付属の国立歴史学研究所（Institute of Historical Research）がある。これらの組織に特徴的なのは、さまざまな学術的スキル習得の機会を提供していることだ。このような取り組みを「ハウツーもの」として敬遠する向きもあるかもしれない。たしかに「優秀な研究者は自力で必要なスキルを習得して然るべきだ」という孤高な研究者像を前提とするならば、そうした懷疑的な態度も生じるだろう。しかし、実際の研究者のキャリアは、研究室で受け継がれた暗黙知や研究会の人脈に多くを依拠してきたのではないだろうか。科学史研究が明らかにしたとおり、ロバート・ボイルやアイザック・ニュートンのような高名な学者ですら、多くの人々の協力と情報提供なしには成果をあげられなかつた。彼らもまた社会的紐帯に依存していたのである<sup>6)</sup>。歴史家ワークショップが後述のようなピアサポートを重視する最大の理由は、学問的営みが豊かな社会性と共同性を基礎に成り立つと確信しているからである。

幸運にも活動への賛同者が増え、関連領域が西洋史から日本史を含む歴史学諸分野へと及ぶにつれて、異なる課題が見えてきた。国際化についての第四の留保、すなわち外国史研究と日本史（国史）研究を

同列に語ることはできないのではないかという問題だ。外国を対象にした研究であれば、外国語での発信の重要性も認識しやすい。また、日本における外国史研究の豊かな伝統を誇るのであれば、その価値を国外の学術コミュニティに積極的に届けていくことにも大きな意義があるだろう<sup>7)</sup>。日本の歴史に関する、国際日本文化研究センター（日文研）をはじめとする研究拠点で活発な国際交流が行われている。同時に、日本語での研究成果と外国語（主に英語）での研究成果には、分析方法や議論の構成の仕方に隔たりも受けられるようだ。日本語での研究成果は、その多くが一次史料などの緻密かつ広汎な分析によって、より正確な事実関係に基づく議論と歴史認識を示そうとしている。さらに、外国語での研究成果が提示している異なる枠組みを視野に入れることで、より多様な議論の文脈に日本史研究を位置づける余地も残されているだろう<sup>8)</sup>。

こうした国内外の日本史研究動向の背景には、研究環境の不均衡があることを見逃すべきではないだろう。海外の日本史研究者は、史料へのアクセスにおいて不利だけでなく、日本各所の研究室で受け継がれてきた、くずし字の読み方、漢文の読み下し方などに習熟する機会を持たない者が多かった<sup>9)</sup>。逆に日本を拠点とする若手日本史研究者にとって、海外における議論の組み立て方を学び、その長所を見出す機会は依然として限定的と言える。しかし最近では、政治史、制度史、社会経済史等の伝統的な分野でも、東京大学史料編纂所や京都大学のいくつかのプロジェクトをはじめとして国際交流が進められている。若手研究者のトレーニングの機会をさらに増やすことで、次世代の日本史国際化にも貢献できると歴史家ワークショップでは考えている<sup>10)</sup>。

上述の4点から浮かび上がる日本の歴史学界が現在直面する国際化の課題とは、文理諸分野における資源の不均衡配分という歴史的経緯を踏まえ、一枚岩の单一的グローバル化の弊害を自覚しつつ、学問の多元的な国際化のあり方を個人レベルだけではなく組織レベルでも模索することである。国際言語で学問的研鑽を続け、母国語の文脈を超えた国際的議論や比較検討を深めると同時に、自國語話者集団の知的伝統に貢献し、その言語圏における思考と思想

を豊かにするという、倫理的な責務を負っている。これは世代を超えて追究されるべき、多面的かつ本質的な課題である。単一の研究者、研究室、研究会、学会、大学が独立で立ち向かえる問題ではない。必要なのは、個別の努力を補完し、それを持続可能にする、百年以上続くような学問の仕組みである。歴史家ワークショップは、このような学問の恒久的基本形成へのささやかな貢献として構想された。デジタル技術は、こうした理想を掲げて活動を展開する際の重要な手段となる。

## II スキルの向上と若手育成

歴史家ワークショップではリサーチ・スキルの向上を目的として、運営委員や参加者のその時々のニーズに合わせたイベントを企画してきた<sup>11)</sup>。本章では、草の根的な国際発信力強化と若手研究者育成活動の実例として、これらを五つの大きな分類の中で見ていく。企画が発展し多角化した経緯が分かるよう、時系列に配慮しつつ、活動紹介を行う。スキル・ワークショップ (Skills Workshop) では、英語でのモノグラフ（単著）出版、国際学会参加、国際雑誌論文投稿などに関する知識と体験を共有してきた。その中で、英語での研究発表を実践的にサポートするリサーチ・ショーケース (Research Showcase) がシリーズとして独立し、定期開催されている。また、英語論文投稿を実現するための助言と実践の場を提供する英文校閲ワークショップのシリーズがある。そして、大学院生や若手研究者による自主的なコミュニティ運営や持ち込み企画の実現を積極的に支援している。主な例として、Tokyo Digital History と RE.F. Workshopを取り上げた後に、これらの活動全体に通じる特徴を 2 点述べる。

### 1 スキル・ワークショップ

2016年5月に若手歴史家ワークショップとして、日本西洋史学会大会に合わせて初めて開催したのが「How to get published—博論から英語モノグラフへ—」である。英語での成果発表の敷居を少しでも下げる目的に、博士論文を研究論文やモノグラフに発展させるための具体的な過程とノウハウを、イギリスで博士号を取得した山口みどりと真保

晶子に共有してもらった。当日は予想を上回る40名が参加し、出版社の方も交えた活発な議論がなされた。国際的な研究成果発表への関心の高さと、オープンな意見交換の場の需要が改めて感じられ、その後も年度大会に合わせて毎年イベントを継続的に開催してきた。2017年の「Skills Workshop: How to get your articles published」では、積極的に海外との接点を持ち続けてきた4名の研究者が登壇し、外国語での論文執筆や海外雑誌への投稿のコツや注意点を共有する場を設けた。前提として、海外の研究者と「一緒に仕事をする」、そして自ら「情報を提供する」という立場で研究することの重要性を指摘した鶴島博和は、国内でも英語で報告する機会を増やし全体的な底上げを行う必要性を強調した。他の報告者からも、投稿前に学会等で口頭発表を行い、フィードバックを得て、雑誌ごとの査読者や読者層の関心の違いを意識するなど、国際学会への参加の重要性が指摘された。

これを受け2018年には公式プログラムの一部としてランチタイムワークショップ「国際学会を有意義なものにするために」を開催した。西洋諸言語を用いた国際学会をさまざまな形で経験してきた3名の研究者の体験談をふまえて、国際的な学術交流のあり方や意義を約100名の参加者とともに議論した。国際学会に報告者としてのみならず聴衆として参加することの意義を指摘した剣持久木は、その経験を日本語で文章にして残し、より広い読者との共有を図る「公共史」としての位置づけの重要性を強調した。このイベントの事後報告書もウェブサイト上で公開されているが、さらに当日のTwitterでの実況報告がTogetherでまとめられて共有されている。そこに記録されている通り、議論の中では国際的な研究活動が日本国内でのキャリア形成に直結するとは限らないことが指摘された。このような現状と問題点の共有を目指して、2019年には「ワークショップ—国際発信とキャリア形成—」を小シンポジウムの枠組みで開催した。最初に隠岐さや香から日本における西洋史学や大学での評価のあり方について問題提起があった。続いて鳥谷真佐子をファシリテーターに迎え、「システム×デザイン思考」による問題解決手法の一つである「因果ループ図」を用

いて、国際発信とキャリア形成に関わるさまざまな要因を俯瞰しながら話し合うグループワークを行った。異なる立場や経験の人々が垣根なく議論に参加し、学会という公の場で問題意識を可視化して共有できたこと自体に、参加者それぞれが意義を感じた。その中で、日本語と外国語での研究活動の時間や労力の配分、ライフワークバランスなどが課題として浮かび上がり、次回のイベント企画につながっている。

上記の日本西洋史学会大会に合わせたイベントに加えて、同種の機会を専門分野を超えたより多くの研究者に提供するため、登壇者に日本史、日本経済史、東洋美術史、比較文学の研究者も迎えたイベントを計6回開催した。これまで共催してきた西洋史学会、西洋中世学会、政治経済学・経済史学会、経営史学会、社会経済史学会に加えて、今後は各種学会・研究所とさらに緊密な協働関係を築き、歴史学界全体のスキル向上と活性化に貢献していく。

## 2 リサーチ・ショーケース

歴史家ワークショップの第二弾として2016年7月に開催した「Research Showcase in British History」では、イギリス史の若手研究者8名が、それぞれの研究テーマについて8分という短い時間で、英語で簡潔に発表し、7分間の質疑応答もまた英語で行った。15分という限られた時間で、専門外の聴衆に自分の研究の本質を英語でわかりやすく伝えるスキルを磨くワークショップは好評を博した<sup>12)</sup>。発表スキルの向上を目指すすべての歴史研究者に開かれたシリーズとしてマニュアル化が進み、西洋中世学会との共催も含め、2020年4月までに10回にわたり、国内各地で新たな協力者を得て70名以上が登壇した。発表者は事前提出した発表原稿に対して2名のレビュワーからフィードバックを受けることで、自信をもって発表に臨むことができる。当日はゲスト・コメンテーターから全体的な議評とより効果的な発表や質疑応答の仕方について助言をもらい、聴衆の投票により（英語の流暢さによるのではなく）もっともクリアで説得力のある発表をした者にResearch Showcase Prizeが授与される。発表者は次回以降、Reviewers' Collegeの一員として、経験者

とペアで原稿にフィードバックをする機会を得られる。

若手研究者がネットワークを築き、研究発表とピアサポートのスキルを実践的に磨くりサーチ・ショーケースは、他の言語や分野でのトレーニングにも応用可能なモデルを提示している<sup>13)</sup>。2020年7月にオンラインで開催された第11回目は、日本文学や日本史研究の国際発信力を向上させることを目的とした。また、フランス語版や国内の留学生を対象とした日本語版の開催の可能性も検討され始めている。この仕組みが順調に継続・拡大できている理由の一つは、8分間（英語で約900単語）の短い発表であるため、経験者であれば短時間でレビューできるからだ。発表者にとっては、他分野の研究者からも効果的な議論の仕方について詳細なフィードバックをもらえる貴重な機会となる。レビュー担当者は、改善された原稿に基づく当日発表の結果から自身の助言の意義を実感できる<sup>14)</sup>。

これまでの発表者の中には、リサーチ・ショーケースでの経験を足掛かりに国際学会で発表の機会を得た者もいる。1年後をめどに発表者に行っていけるアンケートでは、英語での発信に自信がついて留学するきっかけとなり、留学先でも積極的に活動できているとの報告もある。さらには、日本語での研究発表でも専門的な内容を分かりやすく伝えることを意識するようになった、準備段階で原稿を添削してもらい何度も推敲した経験を通じて論文を書く際にも「伝わる書き方」をイメージしやすくなった、との前向きな報告があった。歴史家ワークショップでは発表者のその後の国際交流の成果や達成を祝い、その喜びを広く共有する目的でこうした事後アンケートを取っているが、その結果を集計・管理するためにGoogle Formsを活用している。

## 3 英文校閲ワークショップ

8分間の短い発表を国際学会発表に、そして論文投稿につなげるためのシームレスなサポートを提供するのが英文校閲ワークショップである。学会発表原稿を国際雑誌に掲載される論文に昇華させるには、ライティング・スキルとは別に、文章校閲スキル、つまり徐々に文章の質をあげる推敲スキルが必要で

ある。究極的には、海外の同僚の論文を読み、査読や助言もできるようになることで、国際的「文芸共和国 Republic of Letters」の一員になることを目指す。2017年10月から2018年5月まで10回にわたって開催された第一期は、校閲の知識を共有し、特に自分や他人の書いた文章の「読みやすさ」の背景にある心理を理解することで、読者の気持ちを踏まえた文章校閲の技術を身につけることを目的とした。主に二つのテキストを用いて<sup>15)</sup>、説得力のある議論の組み立て方や効果的な論点の提示方法を確認した後に、実際に参加者の原稿を検討材料として、同僚の原稿にコメントする練習を行った。

英語による論文執筆と校閲のスキルを学ぶことは若手研究者にとって喫緊の課題であるとの認識から、第一期の試みをモデルとして、2019年10月から2020年3月まで第二期が開催され、2020年4月には第三期が立ち上がっている。第三期はオンライン開催のため、首都圏外や海外からの参加者が増えている。その時々の要望に合わせて、投稿前の論文、学会発表要旨、口頭発表原稿などを題材に意見交換が行われてきた。参加者アンケートによると、お互いの原稿にコメントし、議論の一貫性を確認しながら文や段落の構成をていねいに検討する中で、研究内容や論旨をより明確にする技術が磨かれたとの実感があるようだ。実際に、このワークショップで検討した後に投稿した論文が国際的学術誌や学会に受理されるという成果も多くあげられてきた<sup>16)</sup>。また、英文校閲ワークショップの参加者が、先述のReviewers' Collegeに加わり、リサーチ・ショーケース発表者の原稿にコメントをするというサイクルも生まれている。発表前の原稿を共有することで参加者の間に自ずと信頼感が生まれ、アカデミアに必要不可欠なピアサポートを実践する協力的なコミュニティが形成されている。

#### 4 Tokyo Digital History

Tokyo Digital Historyは、歴史研究のためのデジタルメソッドの可能性と課題を探ることを大きな目的として、当時博士課程学生だった小風尚樹を中心となって始めた取り組みだ。歴史家ワークショップとの共催で、2017年9月から「歴史研究者のため

のPython勉強会」や「歴史研究者のためのTEI入門セミナー」を開催し、広い意味でのデジタル・アーカイブ構築やデジタル技術と歴史研究の関係に関心を持つ学際的なコミュニティが形成された。2018年4月には歴史家ワークショップ後援で第一回目のシンポジウムが開催され、およそ100人が参加した。大学院生が具体的な研究実践例を報告し、若手・シニア研究者と話し合うことで、日本ではあまり議論が進んでこなかった歴史研究におけるデジタル・ヒューマニティーズの可能性を探る画期的な機会となった<sup>17)</sup>。一連の取り組みは、2018年5月の第117回人文科学とコンピュータ研究会発表会にて学生奨励賞を受賞した。2020年2月にはデジタル・ヒス脱リーの若手研究者の成果発信と大学院生への実践的なノウハウの共有を目的に第二回目のシンポジウムが開催され、歴史家ワークショップの企画支援事業の対象となった<sup>18)</sup>。なお、本イベントには約50名からの事前申し込みがあり、大人数になることが予測されたため、COVID-19感染予防の観点からYouTubeで講演と発表の様子をライブ配信した<sup>19)</sup>。今後の歴史家ワークショップの活動にもこの方法が活かされることが期待されている。

#### 5 RE. F. Workshop

近年、海外のアカデミアで重要性が強調される社会とのつながりは研究活動にもポジティブな影響を与える得るという話にヒントを得て、博士課程学生の横野翔と鈴木実香子が始めたのがRE. F. Workshopである。その名前には、「研究者（REsearcher）と話題（REFerence）を共有し、皆で熟考（REFlection）する場を生む（Fabricate）する」という意味が込められている。「なぜ、研究をしようと思ったのか」、「なぜ、このテーマ・手法なのか」、「なぜ、そのテーマが面白いのか」について、博士号を取得したばかりの研究者に対談形式で話してもらい、問題関心を共有することで、研究者同士や学生のみならず、一般の方々とも人間的につながれるプラットフォーム形成を目指して、2017年4月に「What Fascinates You in Your Subject? 研究者ってそもそも何してる人なの?」、2018年7月に「Who Are Historians? 歴史家とは誰を指すんだろう?」が

開催された。また、交流を活性化して歴史学のアウトリーチを促進するために、歴史家による解説付きの映画鑑賞を行う Monthly Film Night を6回、ふだんは異なるワークショップに参加している人たちの交流を促す Historians' Meet-up を2回開催した。この交流イベントが後に続くいくつかの持ち込み企画のきっかけとなったことは特筆に値する。RE. F. Workshop が目指すところは、「歴史学のワクワクを多くの人に伝える」という歴史家ワークショップのミッションの中核に重なっている。

その後、歴史家ワークショップの社会発信活動として古川萌が企画し司会を務めたのが、開催中の美術展覧会を楽しむための視点を若手研究者が幅広いオーディエンスと共有する講演会シリーズだ。社会が研究の最前線に触れるのみならず、研究者も質疑応答やアンケートを通して社会の関心のありかを知る双方向のコミュニケーションの場を目指している。2018年8月に『ミケランジェロと理想の身体』展を「3倍楽しむ」、2018年11月に「ルーベンス展——バロックの誕生——」を「3倍楽しむ」、2019年12月に「ハプスブルク展」を「4倍楽しむ」を開催した。特任研究員としてプロジェクトに参加してから開催した第三回目には約200名が参加し、研究者の社会発信活動に対する高い関心を確認する機会となった。後述のとおり、古川の精力的な活動は中辻の社会発信活動に対する興味関心を誘発することになった。

## 6 ネットワーキングとコミュニティ形成

上述のように、歴史家ワークショップのイベントの目的と内容は多岐にわたっている。共通しているのは、コミュニティ形成を重視し、積極的に若手研究者のニーズに耳を傾け、関心のある人を前向きに巻き込み、新規企画が立ち上がりやすい土壌作りに注力してきたことだ。上記の試みに加え、2017年5月より原則として毎週開催してきたライティング・グループにも異なる研究機関からさまざまな研究段階にある大学院生や若手研究者が集まっている<sup>20)</sup>。留学や論文執筆に関するその時々の問題意識を普段から気軽に共有し、解決に向かう知恵を出し合い、進歩や成功を喜び合うピアサポートの場として機能してきた。2020年4月からはオンラインに場所を移

し、非常時でも支え合いつつ各々の作業を進めるためのコミュニティであり続けている。歴史家ワークショップの活動が比較的スムーズにオンラインに移行できているのは、普段から国内外の各地にいる研究者と距離を超えて交流するためにデジタルツールを駆使してイベントを作り上げてきたからだ。また、平常時の対面でのイベントでも、遠方からの参加希望者に交通費補助を行ってきた。結果的に、所属機関や分野を超えたネットワークが形成され続け、地理的かつ心理的距離を超えた交流が重ねられている。あらゆる差異を乗り越えての対話を外国语でも行うことこそが、学問を草の根的な次元で国際化することへの第一歩である。そのステップを踏まずに研究成果を翻訳して発信しても、豊かな意味での学問の国際化は達成されないだろう。また、国境のみならず専門性という壁を乗り越えてアカデミア内外で広く交流を図ろうとすることが、後述する社会発信への第一歩となる。

## 7 ワークショップの手法——オープンな議論の場の形成——

あらゆる立場の人を包摂しようとするコミュニケーションの場は、歴史家ワークショップが取り入れてきた実践的なワークショップの手法に育てられてきた面もある。多様な参加者が一つのテーブルを囲み、ポストイットなどに質問やアイディアを書き出すことで問題意識が可視化され、共有しやすくなり、分野や立場を超えたオープンな議論の場が形成されることが多い。たとえば、2018年9月に縫田宗紀と木下知威が企画した「迷える子羊たちのために——論文執筆の処方箋——」ワークショップでは、参加機会均等を実現するべく手話通訳を2名配置し、KJ法を用いて執筆に関する悩みを書き出してはまとめて解決法を共有した。また、2019年7月に修士課程学生の中山恵の企画で小野寺拓也と藤野裕子を講師に迎えて開催された「史料読解ワークショップ——裁判記録とラブレター——」では、実際に参加者全員が具体的な史料読解と解釈に取り組みつつ史料へのアプローチ方法を専門分野を横断して議論した<sup>21)</sup>。ワークショップにおいて講師は主にファシリテーターの役割を務めたが、学部生や高校教員を含

むさまざまなかたちと共に史料を読み、議論すること、  
とが研究をさらに進めるきっかけとなり、実際に  
扱った史料の翻訳を解題付きで出版することにもつ  
ながった<sup>22)</sup>。

さまざまな留保がある中で国際化を推進し、草の根的に若手支援を行う過程では、誤解や意見の相違も生じる。こうした問題を率直に話し合うためにも運営委員の間でワークショップ形式の研修を行ってきた。2019年8月と12月には鳥谷を再び講師に迎えてシステム×デザイン思考の手法で運営方針や組織設計の改善点を議論し、人文系の学術プロジェクトの企画・運営に長年携わってきた本間友の助言とともに業務効率化を検討した。12月の研修には一般社団法人リヴィオン理事の水口陽子をファシリテーターに迎え、個々人の強みを活かした運営のあり方や、組織内部でのコミュニケーションのあり方を模索した。体系的な問題解決を図りつつ組織の硬直化を防ぎ、常に参加者のニーズに合わせてダイナミックに発展し続けることを目指している。

本章で見たとおり歴史家ワークショップの草の根的活動には学生の声も多く反映されている。これまででもイベント開催報告書の大部分は学生が担当してきたが、記述的な報告にとどまらず、開催後にイベントをふりかえり自由に意見交換した内容を対談形式で報告するという新たな形を取り入れてきた<sup>23)</sup>。このボトムアップの要素を本稿においてもできるだけ忠実に反映するために、次章では大学院生としてイベント運営に携わり、その後も運営委員として活動に参加している中辻の実体験を届けてもらう。そこで扱う社会発信という歴史家ワークショップの主要な活動領域の一つは、本稿のテーマである国際化ともつながっていることを再度強調しておきたい。リサーチ・ショーケースが促進する専門性の壁を越えたコミュニケーションは、社会発信にも応用できるのである。また、社会発信の場で聴衆を選ばずに研究の面白さを伝えようすることは、研究の本質を的確に表現することに通じる。このようなスキルは、海外の研究者との議論や投稿論文の執筆においても重要な役割を果たす。社会発信と国際発信は相互補完的関係になり得るのである。

### III 社会発信を考える

—大学院生の目線から—

歴史家ワークショップにおいて、社会発信とそれを支えるデジタル・コンテンツの活用は重要な取り組みの一つに位置づけられる。オンラインでの情報発信は、受け手の住む場所や職業を選ばないため、アカデミア外の幅広い聴衆への迅速なアプローチを可能にする。つまり、デジタル技術の活用は、アウトリーチ活動にとって非常に有効と言える。

本章では、これまで本会が取り組んできた社会発信の取り組みについて、2019年7月22日に開催された「バズる（？）アウトリーチのすすめ—公益性のある情報発信にむけて—」（以下「バズる」）というイベントに主眼を置きつつ、企画を担当した中辻の視点から紹介する<sup>24)</sup>。これは、本会に携わる大学院生の活動のありのままを記録したエゴ・ドキュメントでもある。どのような思いで活動しているのか、どういった経緯でイベントを開催しているのかという主観を率直に記することで、同様の悩みや不安を抱える若手研究者の読者と問題意識を共有したい。そして、願わくは本会でともに活動したいと思ってもらいたい。前章までの包括的な議論にこうした個別具体的な事例を加えることで、これまでの歴史家ワークショップの歩みをより立体的に提示することも本章の狙いである<sup>25)</sup>。

歴史家ワークショップでは、前章でも言及があつた通り、若手主体のイベントの開催をサポートしている。「バズる」もそうした支援体制の中で生まれた。企画の話が最初に持ち上がったのは、2019年5月の日本西洋史学会大会に際してであった。筆者は当時、本会の運営委員である美術史家の古川萌（壺屋めりの名義も持つ）のアウトリーチ活動に関心、というよりむしろ憧れを持っていた。古川の活動で代表的なものが、前章でも紹介された「○○展を○倍楽しむ」シリーズである。開催中の展覧会の背景知識をより深く理解し、その展覧会をいっそう楽しむためのパブリックな講演会で、当時すでに人気を博していた。アウトリーチ活動に漠然とした関心を持つ大学院生は案外多いのではないだろうか。しかし、研究との兼ね合いや周囲の目といつたいろいろ

な不安が相まって足踏みしてしまう。筆者もそうであった。だからこそ、実績を上げながら社会にも積極的にアプローチしている古川がかつこよく思えたし、一度話を聞いてみたいと思っていた。そんな折に、本会の山本浩司から、アウトリーチの手法を考えるワークショップの開催を検討しているとの話を聞いた<sup>26)</sup>。しかも、登壇者に古川を招きたいという。是非そのイベントの「手伝い」をさせてほしいと言った。気がつくと「企画者」になっていた。誤解の末であった。こうした誤解は本イベントに限らず多方面に及ぶ。そのことが本会を凄まじい速さで前進させている側面がある<sup>27)</sup>。

最終的には筆者と、筆者の研究室の先輩である吉田瞳が中心的な企画者となり、会場であった東京大学の西洋史学研究室の大学院生有志にも協力してもらいながら、古川の他にもシェイクスピア研究者の北村紗衣と講談社編集の丸尾宗一郎を登壇者に招く形となった。正直なところ、イベントを自力で開催することには少し不安があった。コンテンツの大半分は各登壇者の報告に委ねられているとしても、全体を一貫性のあるものとして取りまとめるのは主催者であるし、当日の司会進行役にはプレッシャーがかかる。そして、何と言っても主題がアウトリーチ活動である。アウトリーチ活動は、研究者にとって必須の活動とはされてきていない。しかも、社会に向けて発信する以上、情報にはより一層の責任が伴う。ゆえに、実績の浅い若手がアウトリーチ活動に従事するのは、あまり好まれない。少なくとも、筆者はそのように思われていると感じてきた。それでも取り組むことにしたのは、後述の通り必要性を感じていたからであり、また、歴史家ワークショップによって実現の場が与えられたからである。

筆者がアウトリーチ活動に必要性を感じる一番の理由は、歴史学の価値が十分に社会に認知されていないと思うためである。1994年生まれの筆者は、自分のキャリアがスタートするよりはるか前から文系不要論をさんざん耳にしてきた世代である。当然ながら、歴史学を志す人間の一人である筆者自身は、歴史学の価値を信じている。しかし、その価値は社会にはほとんど理解されていないようだ。実際、人文科学への風当たりは強く、予算は減る一方。就

職口が減っていく中、苦しむのはわれわれ若手である。食べていけないのはわれわれ若手である。どんな業界でも売り上げが下がったら営業に力を入れるはずだ。アウトリーチ活動を、手が空いた時にやる「社会貢献活動」に留めていてよいのだろうか。アウトリーチ活動のあるべき姿を考えたいと思った。

また、単に情報発信の機会を増やしたり、情報の質を上げたりすればよいということでもないようと思われる。デジタル化が進む今日、情報コンテンツは多岐にわたる。TwitterにせよYouTubeにせよ、デジタルベースでの発信に共通して言えることは、その可視性の高さであろう。多くは無料で使うことができ、地理的な制限を受けることもないため、誰の目にも留まりやすい。だからこそ、こうしたツールは単に使えばメリットになるというものではなく、使わないことがデメリットとなりうるものなのである。デジタル化する社会において、人々がアクセスできる情報はその質を問わず溢れかえっている。その中で、科学的な知見に基づいた価値ある情報は埋もれてしまっていて、アカデミア外の人たちからすれば、むしろアクセスしがたいものとなっていると言えよう。アウトリーチ活動の手法についてもまた問われるべきではないだろうか<sup>28)</sup>。

自分の研究の進捗に対する心配は勿論ある。研究に誠実であることと「受けの良い」アピールをすることの兼ね合いもよく分からない。けれども、分からぬからこそ、一度みんなで集まって考えたかった。こうした理由から、アウトリーチ活動のあり方と手法を考える第一歩になればと思い、「バズる」を開催したのであった。

当日は、同じような不安を抱える若手研究者や、学術的コンテンツを扱うメディア関係者から多くの参加をいただいた。講演の中でとりわけ印象深かったのは、アウトリーチ活動で成果を上げている人でさえ、活動の手法や向き合い方については試行錯誤の中にあると分かったことだ。正解のなさが可視化されたことは、漠然とした不安感を打ち碎き、自分自身が答えを探る主体であると認識させてくれた。活動の失敗談を聞くことができたのも貴重な経験であった。アウトリーチ活動というと、個人のカリスマをもって行うイメージがあり、そのことが活動

への敷居を高くしている面もあると思われる。しかし、独善的にならないためにも事前に他人が目を通す工夫をしたり、複数人で行ったりすることも積極的に議論され、筆者を含む「ふつうの若手」が実際に活動するためのヴィジョンが開けたことも良かったと思う。登壇者の報告内容は YouTube 動画で視聴することができ、ディスカッションの内容や参加者の感想はウェブサイト上の開催レポートにまとめてあるので、より詳しい情報についてはそちらを参考照願いたい<sup>29)</sup>。

不十分な点も多かったし、開催に漕ぎ着けるのは容易ではなかったが、本企画を通じて得たものは大きかった。正直なところ、自発的に取り組んだのか状況に促されたのかは、筆者自身の中でも最後まで微妙だ。「自分の企画」という感覚もある一方で、「自分で開催しました」と言い切るには、言葉にならない引っ掛けがある。かっこ悪くてもこれが実際のところだ。ただ、やって良かったとは思う。これは間違いない。なぜなら、ずっと漠然と思ってきた「あつたらいいな」が実現したのだから。次こそは自力でやり遂げたい<sup>30)</sup>。

「バズる」の開催を通じて、今後のアウトリーチ活動に向けたささやかな一步を踏み出すことはできた。しかし、なお課題も残る。やはり情報の質の問題に関しては議論を詰めることはできなかった。デジタル技術は絶えず発展しているため、それをフォローし続ける必要もあるだろう。また、動画配信については、現状ではうまく導入できているとは言いたい。こうした課題を念頭に、歴史家ワークショップは今後も社会発信の活動に取り組んでいきたいと考えている。情報の告知は Twitter で行われているため、読者の方々にもぜひアカウント @Histworkshop をフォロー願いたい<sup>31)</sup>。

### 結びにかえて

この論考の、一見すると風変わりな構成自体が歴史家ワークショップのダイナミズムを体現していると言えるだろう。歴史家ワークショップは歴史研究者の国際的な発信力を強化するために、ボトムアップで試行錯誤を積み重ね、新たな機会を創出する推進力を保ってきた。そもそもなぜこのようなワーク

ショップを運営し続けているのか。それは、今まで必要とされてきたにもかかわらず、なかなか取り組まれてこなかったことを、「気軽に」実現できることに大きな価値を見出しているからだ。上からの指示を待って動くのではなく、ただ与えられるものを受け取るのではなく、参加者同士がお互いを支え合いながら、自ら必要としているものを主体的に企画して運営できるよう働きかけることに力を入れている。「あつたらいいな」と思うものを実現する手助けを（多少お節介でも）したい。自立した活動を増やしていくためにピアサポートを促進したい。そのための細やかな橋渡しをもっと上手にできるよう、ワークショップのファシリテーションのスキルを向上させていくことも今後の課題である。ともにワークショップを作る中で、異なる立場の参加者たちが認識を共有しようと歩み寄り、学び合う。そこで新たなスキルを身につけた人が、また別の場所でもその力を発揮していくことで、学問界全体の底上げにつながるのではないか。こうした小さなアクションの積み重ねが所与の枠組みを補完することで、アカデミアは内側からより活発になり得るのか。このような問題意識を持って、多様な参加者を迎えるながらアカデミアの実践と構造をより豊かにしていきたい。それゆえに、歴史家ワークショップでは草の根運動として目の前の課題に一つ一つ取り組んでいく。自律か他律かという単純な二項対立では説明しきれない緊張が発生することも、本論に示されていた。学問の国際化を目指す中で、こうした緊張とも向き合い、より良い学問的実践を重ね、その楽しさを、専門テーマを超え、国境を越え、大学の内外で共有し続けたい。そうした実りある学術活動が持続可能になるような仕組みを実現していきたい。これらの大きな目標は、より多くの人々との協同の中ではじめて実現可能となるだろう。皆さんにもぜひご参加願いたい。

- 1) 歴史家ワークショップは立ち上げから現在に至るまで多くの協力を得てきた。本稿に記した方々のみならずすべての協力者の皆さんにあわせて御礼申し上げる。
- 2) 第Ⅲ章には「大学院生の実体験をそのまま届けたい」という意図があるため、中辻の本文に対して山

- 本と市川が脚注でコメントする形を試みる。
- 3) 文系学問における「国際言語」については多くの議論がある。たとえば羽田正「新しい世界史へ—地球市民のための構想—」岩波書店〔新書〕、2011年、152-157頁、佐藤仁『教えてみた「米国トップ校』KADOKAWA〔新書〕、2017年、204-206頁を参照のこと。
  - 4) 吉見俊哉『「文系学部廃止」の衝撃』集英社〔新書〕、2016年。
  - 5) 隠岐さや香『文系と理系はなぜ分かれたのか』星海社〔新書〕、2018年、107-110頁。
  - 6) Steven Shapin, 'The House of Experiment in Seventeenth-Century England', *Isis*, 79 (1988), 307-404; Simon Schaffer, 'Newton on the Beach: The Information Order of *Principia Mathematica*', *History of Science*, 47 (2009), 273-276.
  - 7) 2000年の時点では、横山良は「国籍にかかわりなく優れた成果を生む条件は拡大しているし、現に成果は現れている」と指摘している。ただし同時に、日本独自の研究成果を「世界的に示していく気概と努力が不足していることは否めない」とした。横山良、「コメント1「日本の」(?)西洋史学(フォーラム21世紀の西洋史学)」「西洋史学」(200), 2000年3月, 309-311, 310頁。
  - 8) 日本史分野(特に前近代史)では対外交流史と宗教史が学術国際交流の先鋒的な位置を占めている。国際発信の重要性を意識する日本人研究者は近年さらに増えつつある。美川圭『公卿会議』中央公論新社〔新書〕、2018年の「あとがき」を参照のこと。日本史に特化したものではないが、日文研の『世界の日本研究』と *Japan Review* は国際的な日本研究の動向を紹介している。
  - 9) この種の技術習得は国内でもほぼ自助努力に任せられており、その難しさは以下の報告でも指摘されている。浅井皓平、奥田弦希、中山恵「大学院生対談——史料読解ワークショップに参加して——」Historians' Workshop, 2019年9月11日(最終閲覧日: 2020年4月16日) <https://historiansworkshop.org/2019/09/11/primary-source-ws-report/>
  - 10) 2020年6月より、プロジェクト付き特任研究員の黄霄龍による企画で「日本史史料英訳ワークショップ」が開催されている。
  - 11) 各イベントの詳細な開催報告は歴史家ワークショップのウェブサイトを参照のこと。Historians' Workshop(最終閲覧日: 2019年4月16日) <https://historiansworkshop.org>
  - 12) 後述するようにこのスキルは社会発信力の基礎となる。このように歴史家ワークショップの異なる活動領域は密接につながっている。
  - 13) その意義を報告するラウンドテーブル *Historians' Workshop: A Flexible Model for Practical Early-Career Academic Development* を運営協力者のNathan Hopsonが企画し、2020年9月に神戸で開催予定のAssociations for Asian Studies in Asiaに受理されている。
  - 14) 同僚の原稿にコメントをつける経験が研究キャリアに役立つことが期待されるとはいえ、大学院生や若手研究者のボランティアにするのは好ましくないとの観点から、2019年度より謝金を提供している。
  - 15) Wayne C. Booth et al., *The Craft of Research, Fourth Edition*, Chicago: The University of Chicago Press, 2016; Joseph M. Williams, *Style: Lessons in Clarity and Grace*, 11th Edition, Boston: Pearson, 2014.
  - 16) たとえば、イスラムと地中海専門誌の *Revue du monde musulman et de la méditerranée* (2019)、中世哲学専門誌の *Documenti e studi sulla tradizione filosofica medievale XXX* (2019)、海事史専門誌の *Mariner's Mirror* (2020) など。詳しくは「第3期英文校閲ワークショップを始めます」Historians' Workshop(最終閲覧日: 2019年4月16日) <https://historiansworkshop.org/2020/04/05/english-revision-workshop3/> を参照のこと。
  - 17) 小風尚樹「ここから始める日本のデジタル・ヒス トリー——Tokyo Digital History の立ち上げに寄せて——」文学通信、2018年5月18日(最終閲覧日: 2020年4月17日) <https://bungaku-report.com/blog/2018/05/tokyo-digital-historyd3.html>。2018年5月19日付の日本経済新聞でも紹介された。
  - 18) もう一つの支援対象企画で2020年3月12日に予定されていた西洋中世学会若手セミナー「西洋中世学研究者のためのデジタル・ヒューマニティーズ入門」は、COVID-19流行の状況に鑑み中止となった。
  - 19) アーカイブ配信もされている。UTDH/東京大学人文情報学「2020 Spring Tokyo Digital History Symposium」YouTube、2020年2月22日(最終閲覧日: 2020年4月20日) [https://www.youtube.com/watch?v=G1zCMf0MGkU&list=PLWr6KRlhONCdlnOVnZIZVnZINTR\\_C2etg](https://www.youtube.com/watch?v=G1zCMf0MGkU&list=PLWr6KRlhONCdlnOVnZIZVnZINTR_C2etg)
  - 20) 欧米の研究拠点で普及している取り組み。本会では各自の進捗とその日の目標を報告した後、50分の集中したライティングを二セットを行い、最後に翌週までの課題を宣言し、希望者は昼食をともにして解散する形を取っている。

- 21) 事前打ち合わせでは、藤野と小野寺が参加した「特集 史料の力、歴史家をかこむ磁場——史料読解の認識構造（I）・（II）——」『歴史学研究』歴史学研究会、第912・913号、2013年11・12月を起点に、その後の各々の取り組みや考えを議論することが提案された。
- 22) 小野寺拓也・西山暁義「占領地からのラブレター——ベルギー人少女からドイツ人兵士の手紙（1）——」『クアドランテ【四分儀】地域・文化・位置のための総合雑誌』東京外国语大学海外事情研究所、第22号、2020年3月、255-278頁。
- 23) 註9を参照のこと。
- 24) 「バズる」とは、英語の buzz を語源とするインターネット・スラングである。デジタル大辞泉第二版では、「俗に、ウェブ上で、ある特定の事柄について話題にする。特に、SNSを通じて大人數がうわさをしたり、意見や感想を述べ合ったりして、一挙に話題が広まることを指す」と定義されている。
- 25) 本章では執筆担当者の実体験が伝わるように、内容への応答と補足はあえて本文に反映させず脚注内で市川と山本が語り合う形を取る。それゆえ、これ以降の脚注は語り調で進行する。
- 26) 英米の大学では社会発信に関するトレーニングがここ20年くらいでかなり活発になっていることが念頭にありました。例えば、イギリスの History and Policy Training（最終閲覧日：2020年4月17日）<http://www.historyandpolicy.org/training>など（山本）。日本学術振興会や日本学術支援機構も5年ほど前からアウトリーチ活動を推奨していますね（市川）。
- 27) 2018年夏には当初の五倍以上の規模の助成金を獲得でき、イベントをたくさん開催したい！大学生生の「あつたらいいな」を叶えたい！という焦りがあつたのでしょうか（市川）。その焦りが「興味があるのだから企画責任者として『手伝って』くれるに違いない」という都合の良い誤解を生み出したのだと思います。2020年度以降は、企画書を事前に提出し、審査するプロセスを試しているので、この企画書準備が役割分担を話し合う機会になると期待できます（山本）。
- 28) 歴史学での取り組みについては、歴史学研究会（編）『歴史を社会に活かす—楽しむ・学ぶ・伝える・観る—』東京大学出版会、2017年。市川、山本の関わってきた例は、市川佳世子「カルチュラル・コミュニケーションになろう！」『ARTEFACT』2、2019年3月、7（106）-9（105）頁、Tokyo Humanities（最終閲覧日：2020年5月6日）<https://www.tokyo-humanities.org>
- 29) 中辻柚珠・吉田瞳「バズる（？）アウトリーチのすすめ—公益性のある情報発信にむけて—」開催レポート Historians' Workshop（最終閲覧日：2020年4月22日）[https://historiansworkshop.org/2019/09/25/outreach\\_report/](https://historiansworkshop.org/2019/09/25/outreach_report/)
- 30) 英国の大英博物館には大学院生に向けて学術イベント開催の前提知識や具体的なノウハウを共有するスキル・ワークショップや、準備中に相談できる窓口がありました。このようなサポート体制が普及すると学生・若手による企画が増えそうです（市川）。歴史家ワークショップでも新たなサポート体制を準備中です（山本）。
- 31) 歴史家ワークショップ Twitter 公式アカウント（最終閲覧日：2020年4月22日）<https://twitter.com/histworkshop>

# REKISHIGAKU KENKYU

(JOURNAL OF HISTORICAL STUDIES)

No. 1000

September 2020

In Commemoration of the 1000<sup>th</sup> Number

**Special Issue: Digitalization and the Issues It Raises for Historical Studies**

Preface .....	the Editorial Board (1)
The Present State of the Digitalization Historical Materials for Japanese History .....	YAMADA Taizo (2)
Electronic Libraries and Databases in the Chinese-Speaking World and Historical Studies of Modern and Contemporary China: Centering on Outreach Activities .....	OOSAWA Hajime (11)
The Digital Universe of Historical Resources as seen from ECCO .....	KONDO Kazuhiko (24)
A Digital Humanities Approach to the History of the Colonial Andes: The Case of the General Resettlement of the Native Population .....	SAITO Akira, KONDO Yasuhisa, MIZOTA Nozomi & KOYAMA Tomoko (32)
Concerns and Prospects for the Digitalization of the Publishing World: The Survival of Academic Publishing in the Age of Digitalization .....	HASHIMOTO Hiroki (39)
Disseminating the Results of Historical Research through Twitter: The Case of Historical Background Research for NHK .....	MARUSHIMA Kazuhiro (46)
Historical Drama 'Sanada-Maru' .....	SATO Shinya (51)
Twenty Years of 'Cyber Chinese Studies' .....	NAGAMOTO Tetsuya (56)
Communications and the Transmission of the Results of Historical Studies through Twitter .....	NAKATSUJI Yuzu & YAMAMOTO Koji (62)
Historians' Workshop: Promoting Bottom-up International Engagements in the Age of Digitalization .....	ICHIKAWA Kayoko, NAKATSUJI Yuzu & YAMAMOTO Koji (62)

*Edited by*

REKISHIGAKU KENKYUKAI

(The Historical Science Society of Japan, Founded in 1932)

Office : IM Bldg., 2-20, Kanda Jimbō-chō, Chiyoda-ku, Tokyo, 101-0051 Japan

*Rekishigaku Kenkyu* is published monthly by Sekibundō Publishing Co., Tokyo.

Overseas membership dues : ¥11,400 per year.

(国内) A 会費 10700 円 B 会費 8800 円

編集者 歴史学研究会／〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-20アイエムビル2F／TEL.03-3261-4985／代表者 若尾政希／振替口座 00120-1-177282  
 発行所 績文堂出版株式会社／〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-64神保町ビル402／TEL.03-3518-9940／発行者 原嶋正司／振替口座 00130-5-126073  
 http://rekiken.jp/ 印刷・製本：奥村印刷

© Rekishigaku Kenkyukai, 2020 : Printed in Japan

